

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520305

研究課題名（和文）キケローにおけるテオリアとプラクシスのローマ的統合

研究課題名（英文）Rome integration of Theoria and Praxis in Cicero

研究代表者

角田 幸彦（KAKUTA YUKIHIKO）

明治大学・研究・知財戦略機構・客員研究員

研究者番号：70142544

研究成果の概要（和文）：

キケロー（前106～43）は、ローマ哲学史上最大の哲学者である。と同時に、ギリシア哲学、ヘレニズム期の哲学諸学派の本格的な研究とローマへの導入者としての業績は驚嘆すべき高さを示している。しかも彼はギリシア人の哲学的世界観を単に後生大事に敬仰してローマへ伝えようとしたのではなく、ローマ人の伝統、ローマ人の精神に接合し、融合して現実に力あるものに変様させたのである。

キケローはローマ哲学の真の創設者であると目されるが、それは彼がローマ精神の具現者、ローマ人の特質の哲学的表現をなし得た人ということの意味する。キケローはローマ政治における最も力強い弁論家・言論政治家であった。彼の哲学作品は実に幅広く、国家、法律、弁論、自然考察、神論、歴史論、倫理に及ぶが、他に詩作も一流のものを残し得た。しかも議会演説では他の追随を寄せつけない哲学的高邁さと状況との闘争性を彼は常に打ち上げることができた。今日まで彼の政治論争の雄弁の力と説得的滋味を身につけた政治家はいないと言っても過言ではない。弁説の神業の達成者であるキケローはさらに手紙文のヨーロッパ文学史上第一位の名手でもあった。900通残っているキケローの手紙はイタリア・ルネサンス（14・15世紀）と近世フランス（17・18世紀）において、手紙文の絶対的な基準になった程である。

ローマの社会的社会の哲学的表現者キケローはローマ文化全体の総合的で深遠この上ない形成者であった。書くこと述べること、自己の教養的深化に向かうこと、国家政治で毅然と言論競闘に身を挺すること、キケローこそテオリアとプラクシスの統合者である。

研究成果の概要（英文）：

Nowadays it is becoming more important and more necessary that we Japanese estimate deeply and apprehend comprehensively Cicero's wide mental world. The endeavor and diligence of tense and powerful unity between Theoria (all embracing investigations in mental world) and Praxis (all activities of political and social problems) was the most splendid achievement of Cicero and this newly creative direction expresses the Roman special originality to the later world.

Through Cicero, the greatest philosopher of ancient Rome we Japanese should notice and apprehend our weak mentality and the traditional deficiency and need to give a new direction towards humanism, entire formation of human activity. In Rome specially in Cicero These two aspects, that is to say, theoretical wide interest — this is in a good meaning amateur-spirit — and official activity was the highest and most respectful aim in intellectual people.

Cicero was not only one example of unification of these both aspects, but also he was

a true creator of this mental direction in those days. “Who is Cicero ?” “Which endeavors did he continue in his daily life ?” “What is the attractive personality of this philosopher ?” “Why could he make such a political struggle against his enemies powerfully ?” “How did he conquer his sorrowful heavy destiny (Destiny is a severe trial which is given by God) ?” “Which intension did he embrace in his activity of philosophical writings in a lot of scientific fields ?”

These questions are leading me and inspiring my study about Cicero. Already I wrote 7 books concerning Cicero during 10 years (2000–2009). At the central position of Cicero in my philosophical study I burned my philosophical interests in Greek philosophers (Plato and Aristotle) and in modern philosophers (Nietzsche, Heidegger, Arendt, Loewith).

In order to apprehend Cicero’ s originality and speciality deeply we must take the other meaning of Seneca’ s originality and speciality. Seneca is a greatest philosopher in the Roman Imperial time. About this philosopher I wrote already 2 books. In Japan I cannot find anyone who wrote about Cicero and Seneca. My unchangeable attitude toward a scientific and philosophical thinking is on two sides investigations (Greek spirit and Roman spirit, Plato and Aristotle, Descartes and Pascal, Voltaire and Rousseau, Kant and Hegel, Marx and Burckhardt, Husserl and Heidegger, Religion and Philosophy, Catholicism and Protestantism, German Spirit and French Spirit, Japanese Way of Thinking and European Way of Thinking, moreover Politics and Law, Political speech and Law-count speech). These themes are shown in my many books concerning the History of Ideas (Geistesgeschichte) concretely and fully.

About Seneca I want to make moreover a small mention. Seneca was a philosopher and the greatest tragedian. And his life was in itself a tragedy. Seneca had no chance, no opportunity to express his own political opinion and he was unhappy, very unhappy, because he could have no activity to have a confident attack, a drastic struggle against his political enemies in his life.

The unity or close relationship between Theoria and Praxis had no realization, Seneca’ s political environment prevented such a realization. Surely Seneca took a consulship near Emperor Nero, but this position only nominal, it possessed no power of politics.

In comparison to Seneca, Cicero was happy, of course in a tragic meaning. His accomplishment rather his excellent perfection of the unity of Theoria (philosophy) and Praxis (politics) was owing to the clear fact, that these were strong and severe political enemies (rivals) near Cicero. Cicero’ s spiritual highness and earnest study-life had a tight relationship to his political decision and activity. Cicero’ s earnest life way, his unbroken diligence must have had a difficult actual struggle, political battle. Ciceronian wide mental world, his philosophical depth was given an unexpected companionship through his political struggle. Cicero’ s mental width and philosophical keenness was in a sense or rather in a true sense a present from the being and attacks of Cicero’ s political enemies. Caesar, Clodius, Pompeius, and Marx Antonius, these four politicians (not statement in a better meaning, behind them there were Roman armies) were

standing always in the way of Cicero with nasty and wicked plans. And these dangerous politicians continued to make threat through violence. Ciceronian Theoria-ability and eloquence-power gave him the strong confidence against his enemies attacks. And Cicero's speeches toward these enemies (his attack-speech) showed and completed rhetorical and eloquent spirituality. His scholarships, his flower-garden of language-world become without exhaustion a splendid source of his attacks against his enemies.

And the stubborn continuity of political attacks and plots from his enemies burned Cicero's working continuity of theoretical investigations specially philosophical studies.

In the latest time Cicero suffered a fateful blow which coursed him profounder sorrow than any other misfortune of his daughter's death. However overwhelmed Cicero was with grief, he succeeded philosophical studies about Nature, Gods, Knowledge, Moral Citizens Ethics and Law. Ciceronian tasteful personality created European humanism in a true figure.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ローマ哲学、ローマ精神、政治哲学、法哲学、裁判弁説、手紙文、ヒューマニズム

1. 研究開始当初の背景

キケローに関する研究については、まずキケローをローマ哲学の形成者にして確立者として捉え、彼の哲学作品を研究することから臨んできた。その後、ローマ人というギリシア人以上に政治的人間の独自性からキケローの努力を照射すべく、政治哲学と政治行動の視点から分析を行い、2006年に「キケローにおける哲学と政治」を公判した。その過程で、キケローは哲学者であるだけでなく、法廷弁論者でもあったため、彼の法哲学と法活動（裁判活動）を丹念に辿ることなくして、深い真相と意味においては捉えられないと確信するに至った。また、法哲学と法活動のそれぞれについて優

れた研究書や論文は出ているが、法哲学と法活動とを緊密に関連付けた研究テーマは一つもなく、この視点からキケローに接近し分析することで、政治だけでなく法廷での弁説まで行った他に類を見ない哲学者であるキケローを立体的に論ずることができる、という考えに至った。

2. 研究の目的

本研究は、キケローのテオリア（学問求道）とプラクシス（公的貢献）の統合を、彼の法への関わり、つまり法哲学（法思想）と法活動（裁判弁説を主とした法廷活動）の統合から照らし出すこと、そしてこれまで全く問われなかった法理論を形成するキ

ケローと、裁判で骨身を削る（人助けのため）ケローを統合的に捉えることを眼目とする。

3. 研究の方法

先ず三年間はローマ法の流れを一流の、例えば Th. モムゼンの研究書で追いつつ、ケローの法廷弁論を20代から60代まで、重要なものを細やかに分析し、弁論の言葉世界の妙技をその中に秘められた法への哲学的目差しを捉え、ケロー研究を一層深化充実させる。

初年度は、アメリカ出身のセクトゥス・ロスキウス裁判の弁論を細やかに吟味する。次に喜劇役者のロスキウス弁論に向かう。なお、この年度はケローをローマの公職たる地位を昇らしめた「ウェッレス弾劾」に関する文献を手元に配し、精細に分析する。ケローのプラクシスに向かう第一歩で、その足固めを行う。

次年度以降は、ケローの実際の法廷弁論のレトリック性、政治性、ヒューマニズムに加えて、法理論への結び付きを明らかにする上で重要な文献をすでに発見しており、これらを精読し、かつそこに言及されているケローの法廷弁論にも目を向けていく。 J. W. Crawford, *Mtullius Cicero: The Lost and Unpublished Oration* 1984, A. Michel, *Les Rapports de la Rhetorique et la Philosophie dans l' Oeuvre de Cicéron* 2003, J. Rowell and J. Pateersom(ed.), *Cicero the Advocate* 2004, 特に最後の全448頁の論文集は、今回のテーマに決定的なものである。ケローの30代では、カエキナ事件の弁論を取り上げる。これはケローが扱った有名な民事裁判（土地問題）である。40代のケローでは、特に彼が執政官を務めた前63年、翌62年の極めてケローの法意識—法の知、法の体系的習得を実際の裁判での力ある弁論に活かされた法—に関して重要な弁論三つを取り上げる。「ムーレーナ弁論」「P. コルネリウス・スッラ弁論」「アツキア弁論」である。次にケローの50代、60代の法

廷弁論を取り上げる。50代の10年間は、ケローの法活動の充実した時代、彼が実に勢力的に弁論を担った華々しさを示す時代である。「セステウス弁論」「カエリウス弁論」「バブルス弁論」「プランキウス弁論」の四つを特に精細に注釈書と研究文献を渉猟して分析検討する。60代の弁論は、「リガリウス弁論」と「ディオタルス弁論」しか残っていない。共にカエサルを前に弁ぜられた特異なものである。すでにこの二弁論を「カエサル向け弁論」というテーマで研究しているが、今回は視界をもっと広げて豊かな問題意識でこれらに改めて向かう。ケローの法的プラクシスを総括的に論じ、具体的状況の打開を身上とする裁判を貫くより世界市民への訴えというケローの法意識を追跡することとする。ケローの法的活動を、ローマ法制史にも十分目配りして研究する。そして彼の雄弁の政治戦略、加えてヒューマニズム（人間への温情、救済の情熱）、さらに世界市民的寛容を剔快する。これらの研究成果を受けて、ケローの法哲学の世界市民法的法的開存性を開露させる。彼の未完の作品「法律について」は、カエサルの力の急上昇によって遂に公判を断念するところとなった。が故にこそ、この作品の脱ローマ的、脱覇権の高邁さは重要である。この作品が後のヨーロッパにトマス・アクィナス、グロティウス他の自然法思想の提唱者たちに与えた影響は途方もなく大きい。この作品の意義は、K. M. Girardetにより、過去の研究史をことごとく視野に入れて精細鋭敏に論じられているが、今回問題としている法思想と法活動（裁判活動）との密接な関係には向かっていない。何としてもこの不足を埋めるべく、この研究を遂行する所存である。

4. 研究成果

ローマ最大の哲学者ケロー（前106—43）は、学問と実践との統合を、緊張をもって生涯追い続けた。しかも、その学問は哲学を中心としつつ、法学や自然科学さらに文芸への問いへと広がっている。本

研究では、特に彼の法学（法理）と彼の裁判弁説という視界でテオリアとプラクシスとの統合を捉えようとした。テオリアが常にプラクシスと結びつくべきという精神は、哲学発生のギリシアでは熟成せず、言ってみれば御題目にとどまった。ローマ人はギリシア人と違い、極めて現実的であり、国家や社会を哲学に強く関わらせてギリシア人の不足を補おうとした。キケローは欧米における法哲学の真の定礎者と目される。彼の作品『法律について』は、人類史上はじめて自然法を説いたものである。ローマ民族の伝統を尊拝し、ローマの整備された法の有機的体系を誇りにしたキケロー。しかし、彼はローマ人の枠をこえて世界市民的展望に立って、人間の正義公正を打ち上げた。2008年度は、彼の裁判弁説を10件程吟味し、裁判での人間愛を改めて示し出した。「最高の法とは最大の不正」とは、法の原則主義を否定した彼の立脚点であった。

キケローは政治家であり、かつ裁判弁説人であった。この両面を一つに結びつけた彼のプラクシスの根底にテオリアの探究者すなわち哲学者キケローがいた。2009年度は政治哲学者キケローを五人の哲学者すなわちプラトン、ヴィーコ、ブルクハルト（この人物は歴史家であるが、私の判断では立派な哲学者である）、アーレント、レオ・シュトラウスと関係づけて一著（『政治哲学へ向けて』）を書き、出版した。さらに裁判弁説にその全人的な教養と深遠な学知をとかし込んだキケローの側面を400字原稿用紙1670枚を入念な参考文献の読みと共にまとめ、700頁の大著として公刊した。キケローの裁判活動を時代的に五期に分けて、計17篇の弁説を注釈書と研究文献を沢山用いて、解釈した。そして、いずれの事件もキケローの投ぜられたその時代の政治状況とかたく結び合わさっていること、キケローは被告だけでなく自らの政治人生の過去と今を弁説したことを細やかに説得的に示し出した。

2010年度は、ローマ最大の哲学者キケローの政治哲学と法哲学を定評ある研究文献

をほぼ全て視界に置いて論究すると同時に、彼の裁判弁説の具体的内容を刻明にたどり、いかなる政治的かつ法的な理念と抱負で、困難な裁判闘争を断固として引き受けたかを関連づけた。被告の運命は弁説人が複数いても、常にキケローの弁説の説得力にかかっていた。このことも裁判弁説の数々の精細な追考によって明らかにした。そして、キケローの裁判弁説を歴史的、時代的に理解する為に、ローマ法にも十分研究書を大いに用いて向かった。ローマ法はローマ人の精神そしてそのギリシアとは異質の特質を示すものであり、哲学者キケローの哲学者的存在性（あり方）を捉えるには、ローマ法の森の中を歩み行かねばならない。法という現実的対処を哲学者キケローは哲学の中に細やかに入れ込んでいたことも論述し、著作化した。

長らく、ギリシア哲学の代表者プラトンとアリストテレスをテオリアとプラクシスの統合という問題から考え、著作を三冊著してきた。ローマ哲学のギリシア哲学からの影響は決定的であるが故に、ギリシア哲学の誠実で細やかな研究（原典と研究文献の熟読とそれらへの対話的対決）がなければ、ローマ哲学のそしてローマ最大の哲学者キケローの哲学の真の把握はできない。また、ローマ人のギリシア人にならぬ現実性、実践性についても、その独自の創造性を汲み上げる意欲がないと、ローマ哲学はその深さと高さが浮き出てこない。日本では、この点が今もって疎かになっている。

私の研究は、日本の哲学をヨーロッパ哲学のプラトン、アリストテレスと並んでの根源力であるキケローに光を当て、彼の重要性を見出すことであった。しかもこのことは近現代のヨーロッパの哲学にもすっかり切り結ぶ広い学的姿勢が不可欠である。このことも私は本格的に課業ともしてきた。20世紀の政治哲学のキケロー的な視界を世に示してきたつもりである。

全研究期間を通じて、テオリアとプラクシスの統合者たるキケローの重要性を法哲学と法活動（裁判弁説）とを関係づけて分

析するという新たな視点で究明した。キケローは、ローマ哲学史上最大の哲学者であると同時に、ギリシア哲学、ヘレニズム期の哲学諸学派の本格的な研究とローマへの導入者としての業績は驚嘆すべき高さを示している。しかし彼はギリシア人の哲学的世界観を単に後生大事に敬仰してローマへ伝えようとしたのではなく、ローマ人の伝統、ローマ人の精神に接合し、融合して現実力あるものに変様させたのである。ローマにはギリシアと違って政治的社会というのが大きく力強く活性化していった。ローマ人はギリシア人にはない鋭敏な社会的感性があった。政治は単に国家運営という狭い枠で繰り広げられるというよりも、社会的社会という大きな人間的交流の中で花開いていった。

キケローはローマ哲学の真の創設者であると目されるが、それは彼がローマ精神の具現者、ローマ人の特質の哲学的表現をなし得た人ということを意味する。キケローはローマ政治における最も力強い弁論家・言論政治家であった。彼の哲学作品は実に幅広く、国家、法律、弁論、自然考察、神論、歴史論、倫理に及ぶが、他に詩作も一流のものを残し得た。しかも議会演説では他の追随を寄せつけない哲学的高邁さと状況との闘争性を彼は常に打ち上げることができた。今日まで彼の政治論争の雄弁の力と説得的滋味を身につけた政治家はいないと言っても過言ではない。

弁説の神業の達成者であるキケローはさらに手紙文のヨーロッパ文学史上第一位の名手でもあった。900通残っているキケローの手紙はイタリア・ルネサンス（14・15世紀）と近世フランス（17・18世紀）において、手紙文の絶対的な基準になった程である。

ローマの社会的社会の哲学的表現者キケローはローマ文化全体の総合的で深遠この上ない形成者であった。書くこと述べること、自己の教養的深化に向かうこと、国家政治で毅然と言論競闘に身を挺すること、テオリアとプラクシスの統合者たるキケロ

ーが重要なのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①角田幸彦、キケローにおける法活動—キケロー20代の弁論演説について、明治大学人文科学研究所紀要、査読有、65冊、2009、62-104
- ②角田幸彦、前50年代後半におけるキケローの政治思想と政治行動、明治大学人文科学研究所紀要、査読有、65冊、2009、106-156
- ③角田幸彦、キケロー「セステイウス弁論」について、明治大学教養論集、査読無、442巻、2009、79-111
- ④角田幸彦、キケローの「フラックス弁論」、明治大学人文科学研究所紀要、査読有、67冊、2010、30-58
- ⑤角田幸彦、キケロー「ムーレーナ弁論」について、明治大学教養論集、査読無、453巻、2010、49-105
- ⑥角田幸彦、改めて日本におけるローマ哲学の意義について、明治大学教養論集、査読無、483号、2012、13-84

[図書] (計3件)

- ①角田幸彦、文化書房博文社、キケローにおけるヒューマニズムの哲学、2008、354
- ②角田幸彦、文化書房博文社、政治哲学へ向けて—キケローとプラトン、ガイウス、ブルカルト、アレント、レオ・シュトラウス、2010、252
- ③角田幸彦、文化書房博文社、キケロー裁判弁説の精神史的考察、2010、702

6. 研究組織

(1) 研究代表者

角田 幸彦 (KAKUTA YUKIHIKO)

明治大学・研究・知財戦略機構・客員研究員
研究者番号：70142544